

北海道遺産
Hokkaido Heritage

北海道遺産・北見市指定文化財

ピアソン記念館

第96号

2021. 1. 31

ピアソン便り

発行人：吉田 邦子（理事長） 編集人：伊藤 悟（理事）

NPO 法人ピアソン会事務局

(事務局長 伊藤 悟)

〒090-0036

北見市幸町7丁目4番28号

Tel. FAX 0157-31-1215

ピアソン記念館内

午前9:30～午後4:30

e-mail アドレス

pierson@yacht.ocn.ne.jp

投稿

ピアソン夫妻の年譜から拾う

一月、二月、冬にまつわるあれこれ

文責：北原俊之

一月十四日

ピアソン宣教師 生まれる

一八六一（万延二）年

ピアソン宣教師

生誕一六〇年

ピアソン宣教師ことジョージ・ペック・ピアソンは、一八六一（万延二）年一月十四日、米国ニューヨーク州エリザベス市で、父デヴィッド・ハリスン・ピアソン、母キャロライン・ペック・ピアソンの四男として生まれました。

一八六一年一月はアメリカ南北戦争の火蓋が切られる直前の戦時状況下でありましたが、教育者である牧師の父は、当時、パール・コテージ・セミナー（高等教育の予備教育をする私学）を経営し、ピングリー氏を招聘するなどしてエリザベス市の教育を活性化する活動をしていました。また母は、女子教育の学校を設置したり、ウエストミンスター長老派教会を献堂する活動をするなど社会活動に

尽力していました。

本年二〇二二年一月十四日で、生誕一六〇年になります。

※ピアソン宣教師はエリザベス市のどこで生まれたか。

各種の記録によると、一八五〇年、父は、セイラムアベニューのピングリー・プレイス角に「パール・コテージ」を建設し、五年後に開校したとあることから、この場所が、ピアソンさんが生まれた場所ではないかと思われます。ただし、推測の域をでませんので、どなたか情報がありましたら、ご教示願いたいです。

野付牛の冬

一九一六（大正五）

一九一七（大正六）年

驚くべき降雪の時期と量

居住まもない野付牛の冬の厳しさに驚く

ピアソン夫妻が野付牛に居住して三年目の冬の様子を報告しています。冬の厳しさについては、度々

報告書に見えますが、この回がとても印象に残りましたので、改めて原文から翻訳してみました。

【ピアソン夫人の個人的報告】

1916年5月～1917年5月
～抜粋～

二、当地（野付牛）の厳しい冬

この冬は、期間が長く、寒さ厳しく、猛吹雪の回数が多いこともさることながら、実は、雪の積もる深さと、雪がいつになっても、執拗によく降ることが特徴なのです。

実際に私達は、野付牛の市街地から外れた高台にある私達の家にたどり着くまでに、15フィート（4.5m）の吹きだまりを掘って進み、10フィート（3m）の高さの雪渓を通ることもありました。12月31日には、教会へ行くのにスキーで行きました。それが、2月4日頃には、出かけるのに、登山用のストックを使いなんとか歩くことが出来るようになりました。3月12日頃には、「積雪の表面が堅くなった」堅雪の上を楽に歩けるようになっていました。4月12日頃は、地面はまだ雪で白かったです。4月4日にヒバリがやってきて何週間かのあいだ歌い続けていた頃、雪がすっかり消えましたが、しかしその後、4月29日に雪がまた降り積もり、私達は、毛皮を身につけ、

ゴム長靴を履いて、6インチ（15cm）の雪を踏んで、とぼとぼと教会へ歩いて行きました。5月になってようやく暖かさと喜びとがやって来たと思ったのも束の間、5月9日に、冬の間じゅう耐えてきた最もつらい寒さとともに、雪がまたもや戻ってきたのです。

（一九一七（大正六）年五月十五日記す）



写真右／ピアソン邸裏の坂でスキーをする北星女学校の女性宣教師たち。
一九二二年一月撮影。
（北星学園創立百周年記念館提供）

一月

一九二二（大正十）年

アイダ夫人の小論「芸者とは何か」が掲載される。

※誌名：The Omni Mustard Seed

Vol. XIV, No. 7

婦人矯風会活動の報告

矯風会活動の中でも、特に女性の救済活動については詳細が書かれたものはあまり見かけませんが、伝道局への報告の中に、さきやか

ですが記述された部分がありましたので、ここに紹介します。改めて原文から翻訳してみました。

【ピアソン夫人の年次報告】

1924年～1925年

〔抜粋〕

「女性の」救済事業に関して、三件の事案が落着くまでに、私たちの信仰、気力体力根気が大いにおびやかされ、不愉快な感情がきたてられ、さらには、時間とお金が莫大に消えてゆきました。

理解しがたく、また悲しいことではありますが、この案件の三人の女性はみな、洗礼を受けたクリスチャンでありましたし、さらにそのうちの二人は、自ら身売りにしていたのです。事の顛末を詳細に語ると長くなってしまいますので、たゆまぬ必死の祈りが、彼女たちがとらわれていた「いわば」牢獄のとびらを開かせたのだということにしておきましょう。

それにしても、彼女たちは、「公娼制度の」法の認可を受けていない料亭の「公娼ではない」奉公人となっていて、「公娼であれば自ら行使できる」自由廃業（いつでも仕事を辞める権利）の法律など適用されるはずありませんので、そんな彼女たちを身請けして自由の身にしてあげるために、私たちは、かなりの大金をつぎ込まなければなりません。このようなことは、二五年間の救済事業の中で初めてのことでした。

現在この三人の女性はみなキリスト教の施設に身を寄せており、うち一名の既婚女性は、キリスト教信者のご主人と普通の暮らしに戻っています。

（一九二五（大正十四）年五月 野付牛にて記す）

二月八日

一九〇〇（明治三三）年

明治学院から送った手紙
ピアソン宣教師、伝道の決意を表明

日本の現状を分析し、伝道の好機であることを確認している

ピアソン宣教師が、明治学院を辞め、伝道の決意をしているのがわかる内容です。改めて原文から翻訳しました。

※かなり説明的な訳にしてみました。真意と異なっているかもしれません。

■手紙 明治学院、東京、日本

1890（明治23）年2月8日

ギレスピー博士宛

〔抜粋〕

目下、日本の国の関心事は政治

であると思います。教養ある人々は、「政治に」夢中になっています。しかし、私達（アメリカの人民）が経験してきたような、個々の人間を突き動かすものとなる何か（自由や権利）が国全体のものとしてまとめ上げられる「憲法と権利章典の発布」ことになって初めて、「日本（の）」の「文明開化」が確立されたことを実感するのだということは「日本の」人々には理解しがたいでしょう。法律を教える教育機関などのいくつかの学校には、全国各地で法律を講じるために出かけて行くような先生達が、ほとんど居なくなつてしまっています。政治は、まったくの趣味のようになっているのです。とはいえ、人々の心の奥底には、愛国心のようなものもないことともないとは思いますが。

（日本にいる）私達宣教師にとつての問題は、政治ではありません（もちろん、政治が、私達の問題を解決する一助にはなるとは思いますが）。私にとつての悩みは、教育にかかわる仕事とはまったく別の福音伝道師をめざすことが正しいのかどうかです。やってみて、結果は時がたてばわかるでしょう。もうひとつ、ことは「日本語を習得すること」も重要なことですが、これは普段からこつこつと継続す

るしかないでしょう。（中略）

日本の状況はとても興味深いです。話を聞いたところによると公立の学校が、数を減らして、東京を除いた近郊で「公立」高等中学校が4つ廃校になるという話があります。高等中学校は、教育制度の段階では、大学の1つ前あたりです。公立の学校が減るということは、それはミツシヨンスクール（の役割）をさらに押し進める絶好の機会だということです。私達の学校は、現在、実際に高等中学校と同等であると思えますし、そうでないとしても、もうすこし時間をかけ総力をあげて取り組むと、学内のいくつかの教育課程科では少なくとも高等中学校と認められるはずです。私達の人材は豊富ですし、授業を行うための施設設備も充分にあります。

私がこれまで日本語を学んできた期間は、決して長くはなく満足していません（でも、日本語を話すことが障害にならないような場所に居たらいいのではないかと、あなたは思うでしょう）。長い人生には色々なチャンスがあるはずですが、いま偶然手にしたチャンスを生かすことこそ、やるべき事です。

別の手紙

明治学院、東京、日本

1889（明治22）年11月14日

ミセス・フライ宛

〔抜粋〕

日本の若者たちはみな、先祖から代々受け継がれた愛国心を持っています。古い封建的な道徳、いいかえると社会の規範を示し日本人としての個性を形作らせる慣習が、新しい社会体制のなかで破壊されたため、すべての者が自ら独自の規範で行動していますし、また、古くからの宗教に漠然と不信を抱いていますので、キリスト教を広めるのにまたとない好機で、若者達自身も、古いものを捨てなければならぬのです。



「ニュージーランドからの便り」第25回



ピアソン会顧問
G・ハード氏

2021.1.5

◆新年おめでとうございます。皆様にとって良い新年でありますように。

12月31日のメッセージありがとうございます。ございました。小坂さんの「詩編23篇」の書はまことに素晴らしく、感謝いたします。詩編の慰めのメッセージは、多くの人々がコロナウイルスから日常を取り戻す難題に直面しているこの時にこそ特別にふさわしいものです。

◆こちらでは、クリスマスと新年



を大勢の家族が集まって、とても楽しく過ごしました。多くの他の国々では、制限やロックダウンの中にある時、ニュージーランド国内では集まりができて幸運です。



◆昨日ワンガヌイへ南下し、ファームコテージで過ごしています。心地よい夏の天候に私はドアを開けて、新鮮な空気に触れています。今朝、果樹園へ行くと、プラムが摘み頃になっているのが見えました。大量ではありませんが、食べたりおすそ分けしたりするには十分です。

◆昨日、ドライブの途中でバックカントリロード（山奥の道）を辿ってみました。穏やかな心地よいところで昼食をとるために車を止めました。まさに詩編にあるよう



な「青草の原、憩いの水」でした。全く予期しなかったことには、ケルンには「アラトト学校跡地」1915年から1955年まで存在したと刻まれていました。学校の痕跡は何もありませんでしたが、雄々しい2本の柏と子牛用パドックがありました。今朝ここで撮った写真とその時のものを送ります。



◆北見の、全ての友人方にどうぞよろしく。グラハム・ハードより
◆早速の返信ありがとうございます。メッセージと写真が無事届い

てよかったです。皆さんにすぐ見せてくださるとは嬉しいです。今、ここは美しく、静かなイヴニングです。もう2枚の写真をメールとともに。



ピアソン記念館&ピアソン会ホームページ案内

ピアソン会HPアドレスは、
<http://www.npo-pierson.org/> でご覧いただけます。

各種行事報告など、どのような雰囲気で開催されているのかを、皆様に知っていただけるように動画で報告しています。昨年の行事では、クラシックギターコンサート、クリスマスリース講習会、クリスマスツリー設置の様子など、各行事ごと約2分から3分の編集内容で見いただけます。ぜひご覧ください、またご批評をお願いします！

スポンサー募集！
今後もピアソン便りの隔月刊発行を継続するために、協力スポンサーを募集しています。年間1万円の協賛金で、会報に右図スペースでの広告を毎回掲載します。スペース×6回となりますので、スペースを2倍とした場合は年3回となります。詳細については事務局まで。

グッズの頒布
！！
ピアソン記念館事業の資金源として！
・絵葉書 ・押し花
・香り袋 ・マグネット
・薄荷(和種)地元仁頃産
取り卸し油100%
*仁頃香りの会産 10ml
*スプレータイプ 15ml
・クリアファイル
・ピアソンブックレット
(第1号から第6号)
改訂版「使徒はふたりで立つ」
改訂版「六月の北見路」
※詳細は、ピアソン会ホームページにてご覧ください。



「ピアソン学事始め」¹³

この「ピアソン学事始め」は、18年前に街の情報誌に書かれたものですが、少し手を加え年号なども修正し改稿として連載しています。

ピアソン会理事 伊藤 悟

(13) アイダ・ゲップ・ピアソン 夫人について



などが記録されています。

また卒業後、数年間は自分の進むべき道を模索していたようですが、海外宣教活動を選択することに自分の将来を見出し、たどり着きます。それもアフリカへの伝道を希望していたようです。しかし、プロテスタント聖公会伝道局は、日本への宣教師を必要としていたことから、日本への派遣を決定したのでした。

小池創造氏著「続・六月の北見路」の中に、ピアソンがアイダ夫人について書いた貴重な冊子の訳文が掲載されています。この冊子がいつ何処で書かれたものか不明ですが、夫人没後の一九三七（昭和12）年の頃（註①）と想像されます。

訳文から、夫人はピアソンより一才年下の一八六二年生れであることが解ります。また、母を七才の時に亡くし、以後ドイツにいる叔母（註②）の世話を受け、シウトウツトガルトで高校時代を過ごした後アメリカに帰国し、ニューヨーク市にある「旧十二番街学校」と教員養成学校で（註③）教育を受けたこと

何年に来日したのか、正確な記録を私はまだみつけておりません（註④）が、日本では最初の五年間を東京のセント・マーガレット女学校（立教女学院）で、次に番町女学校の教師として活動、その後、福島県の県庁所在地で伝道をしたことなどがこの訳文によってわかりました。その後、一八九五年にピアソンと結婚したと書かれておりますので、日本でのアイダ夫人の活動を知る貴重な訳文資料でもありますが、この冊子の原本が現在どこにあるのかは不明です。ぜひ見つけたいものです。

「ピアソン学事始め」補遺

(1) 2021年1月現在

私たちがピアソン会活動の一つの目的に、ピアソン夫妻についてより詳しい調査研究があります。22年前に会を発足させてから、夫妻の定かでない年譜・活動・履歴・などなど、地味ではありますが資料を探してきました。

この間、いろいろなことが調査研究により判ってきています。各会員の努力によって貴重な資料を発見できたり、協力者からの資料提供などもあり、夫妻の家族のことや日本伝道への経緯などなど。上記「ピアソン学事始め」を発表した当時不明であった部分で、其の後判明したことは、補遺のシリーズで解説を加えていきたいと考えております。

(註①)、2006年にフィラデルフィア宗教資料館への調査で、この小冊子の英文の原本を見つけ、夫人の葬儀後と判明。
(註②)、ピアソン便り第95号に叔母の詳細について解説。
(註③)、ピアソン便り第85号にて詳細を発表。
(註④)、インターネット上で米国聖公会の日本への派遣宣教師情報等データで1890（明治23）年10月と確認済み。



「Presbyterian Historical Society」で複写した『Ida Goepf Pierson』



ピアソンの丘

今年も、保育園や幼稚園の園児達がピアソン公園の坂で、ソリ滑りをしています。この坂は、ピアソンさんが住んでいるところは、「ピアソンの丘」と呼ばれていました。

1933（昭和8）年発行の『野付牛名鑑』には、『ピアソンの丘は野付牛駅より約五六町にして夏は散策地として、冬は町内唯一のスキー場としてウインタースポーツマンの行楽場たり』と記されている。また北見市年表の1923（大正12）年1月に、『野付牛スキークラブ会長河西貴一ら旭川第7師団から池貝大尉を招きピアソンの丘で単仗スキーを受講』との記録もあります。今回の北原氏の投稿で使用した北星女学校の宣教師のスキー遊びの写真は、1921（大正10）年1月のものですので、おそらく北見で初めてのスキーと考えられます。ピアソンの丘は、北見スキー発祥の地でもあります。

編集後記

96号をお届けいたします。

年末よりさらに全国的に新型コロナウイルスの感染が蔓延し、多くの人々がお亡くなりになったり、経済的な影響で職を失う人も多く出てきています。ウイルス感染を止めなくてはいけないし、経済活動を止めるには多くのリスクを伴うので、本当に大変な状況です。一年前、日本でもウイルス感染が確認された時、正直のところ私は二、三ヶ月で終息に向かうのではと考えていましたが（おそらく政治家も？）、意に反し、このようにひどい状況になるとは思ってもいませんでした。歴史に学ばない不勉強の極みです。

それに反し、多くの感染学の専門家は、「次の冬には大変なことになる」と警鐘を鳴らすのを、楽観論者は「過度に煽っている！」などと批判するなどして政治家を混乱させ、政府は必要な対策を怠ってきたのではないのでしょうか。

ピアソン夫妻が北見に居住した15年間に、世界的に流行したスペイン風邪がありました。1918（大正7）年から1921（大正10）年まで、世界中を第一波から第三波が襲い（世界人口の27%が感染、25.5%が死亡）第一波が患者数・死亡者数が増え、第二波では変異で毒性が高まり死亡率が急上昇。第三波を経て収束にむかっただけです。日本では、第二波の影響を強く受け、第一回の流行が1918（大正8）年の10月から翌年3月まで。オホーツク地方でも推定患者数三万人、死亡者数2511人との記録があります。その後第二回・第三回と1921（大正10）年3月まで続き多くの犠牲者を出しています。当時の日本政府はどの様な対策をしていたのでしょうか？また、国会ではどの様な議論がなされていたのでしょうか？ 会報の編集をしながら当時の事を考えていました。

（理事兼事務局長）伊藤 悟